

幸福感と意思決定

—— 決定スタイルと自己制御モードの文化差 ——

楠 見 孝

京都大学

Subjective well-being and decision-making:
Decision style and self-regulatory mode across cultures

Takashi KUSUMI

Kyoto University

In this study, we explored cultural differences in subjective well-being and decision-making. Firstly, we examined the Japanese conceptions of happiness and risk by means of a word association task and a questionnaire, and discussed the dialectical nature of happiness in East Asia compared with Euro-American cultures. Secondly, we conducted a cross-cultural survey and found that scores on life satisfaction, self-esteem, maximization, and regret in the Japanese sample are significantly lower than in 12 other countries. Thirdly, we conducted a survey in Japan and found that the negative relationship between critical thinking attitude and life satisfaction was mediated partially by assessment tendency, maximization, and regret. On the other hand, the positive relationship between critical thinking attitude and life-satisfaction is mediated by locomotion tendency. Finally, we discussed the effect of wisdom on critical thinking and practical intelligence in solving problems in life, referring to our Japanese survey data.

Key words: happiness, decision style, self-regulation, maximizers, critical thinking, culture, individual differences

キーワード: 幸福, 決定スタイル, 自己制御, 最大化追求者, 批判的思考, 文化, 個人差

1. は じ め に

本論文は、主観的幸福感と意思決定の文化差に関して、幸福の概念、意思決定スタイル、自己制御モード、そして叡智の4つの観点から検討する。

主観的幸福感 (subjective well-being) とは、生活・人生 (平穩、満足度なども含む) に関する人の感情的・認知的評価である。この評価には、人生満足度 (life satisfaction)、すなわち、誕生以来の人生あるいは生活の各領域の充実度に関する認知的評価 (仕事、結婚、余暇など) だけでなく、出来事に対する感情的評価も含む (Diener, Oishi, & Lucas, 2003; 大石, 2009)。したがって、主観的幸福感の判断は、人生全体、個々の出来事のアクセス可能性の影響をうける。さらに、状況や気分によって左右されるため文脈依存的である (Schwartz & Strack, 1999)。このように主観的幸福感は、認知的な判断過程の結果であり、個人の

持つ幸福イメージに含まれる規準、理想との比較や順応が影響を及ぼす。これらの判断プロセスにおいて、「もし…していたら」といった反実仮想と後悔が生じたときには、決定の満足度や幸福感は低下することになる (e.g., Schwartz, 2004)。

そこで本論文では、主観的幸福感の判断を支える概念と叡智、判断プロセスに関わる意思決定と自己制御における個人差、さらに文化との関係について検討する。

第1に、主観的幸福感の判断を支える幸福のイメージや概念をリスクや意思決定の観点から検討する。幸福について人がもつイメージや概念的知識は、理想のモデルとして人の行動を方向づけ (e.g., Lakoff, 1987)、自他の幸福の度合いを評価するときに影響を及ぼしている。ここで、幸福の概念は文化差があることがこれまでも多くの研究で示されている (たとえば、大石・小宮, 2012)。そこで本論文では、連想法と質問紙法に基づいて、幸福の概念とリスクや意思決定との関連に焦点を

絞り、その文化差を検討する。これはつぎの第2の目的に結び付く。

第2に、幸福になるためには、人生において、良い意思決定を重ねることが重要である（たとえば、竹村、2008、2011）。良い意思決定は、短期的には快適な感情を引き起こし、長期的には人生の目標の達成に近づく。ここでは、幸福に結びつく良い意思決定の規準として、効用最大化、満足化、リスク最小化、後悔最小化、制約の充足について論じる。あわせて、こうした意思決定に関わる個人差である意思決定スタイルと幸福感の関連、その文化的差異について論じる。

第3は、幸福感と自己制御（self-regulatory）モード（Higgins, 2008）との関係である。本論文では、幸福のための意思決定において評価を重視する活動を、行動の自己制御において目標・手段・現状の評価をおこなう評価（assessment）モードと関連づけて論じる。評価モードにおける批判的な思考態度は、論理的でバイアスのない熟慮的な思考態度であり、よりよい決定、さらに幸福感に結びつくと考えられる（たとえば、楠見、2011a）。しかし、決定における批判的思考態度は、選択肢間の比較・評価を過剰におこなうことによって、後悔を引き起こし、幸福感を低減させることも考えられる。さらに、自己制御モードは文化と適合する形で発揮されるため、評価モードと批判的思考が幸福感に及ぼすプロセスの文化差について検討する。

第4は、幸福のための意思決定を支える高い水準の態度や知識として、人生における経験によって獲得される叡智（wisdom）について検討する（e.g., Kunzmann & Baltes, 2005）。叡智の一部は、第3の目的であげた批判的思考態度に基づく吟味と洞察によって支えられている。ここでは、叡智が批判的態度を働かせつつ、適切な意思決定や問題解決を通して、幸福感を高めていることを、文化の問題とあわせて考察する。

2. 幸福の概念とイメージ

2.1 幸福の素人理論

幸福について人がもつイメージや概念的知識は、幸福の社会・文化的な知識として、社会の中で共有されている。幸福に関する知識は、人がある社

会・文化の中における経験、マスメディア、教育などを通して構築した幸福の内容に関する素人理論（lay theory）、通俗理論（folk theory）、暗黙の理論（implicit theory）である（たとえば、Furnham, 1988；楠見・米田、2007）。それは、単なる知識ではなく、理想像として人の意思決定や行動を方向づけ、その結果の評価を支えている。人のもつ概念やイメージを明らかにする方法には連想法、自由記述法、SD（semantic differential）法などの評定法、概念地図法などがある（楠見、1996）。2.2では、幸福の概念を、意思決定との関連で捉えるために、連想法によって、刺激語「幸福」と「リスク」に対するそれぞれの連想語を対比したり、対提示「幸福とリスク」に対する連想語と比較することで、幸福感の概念の特徴を明らかにする。

2.2 幸福とリスクの概念の連想法による検討

楠見（2012b）では、幸福の概念を明らかにするために、日本人大学生116人に対して、「幸福」に対して3語の連想語を求めた。出現頻度の高い主要な連想語は、家庭・家族（出現比率18.1%）と笑顔（18.1%）、愛（12.0%）、満足（11.2%）、お金（10.3%）、暖かい（9.5%）、安心（6.9%）、達成（2.6%）であった。ここで、3語の連想語において、同時に連想された頻度（共起頻度）に基づいて、単語間の類似性を求め、概念の構造を検討した。Figure 1は、テキスト解析ソフトTRUSTIA（JUST SYSTEM）を用いて、共起頻度データに基づいてクラスター分析（最長距離法）を行った結果である。連想語は、大きく分けて、長期的に欲していて（wanting）、達成し所有する幸福「家族」「お金」などの人生満足度（satisfaction）に結びつくものと、短期的な快的状态（positive feeling）を示す「笑顔」やそれを引き起こす好きなもの「お菓子」などや好きなこと（liking）に分かれる。長期的幸福には、「家族」、「友人」、「お金」などの所有する幸福（possession）と、「追求」（seeking）し「達成」（fulfillment）する幸福、日常生活における「睡眠」「食事」によって得られる幸福（ordinary life）が含まれる。これは、大石（2009）が指摘するように、幸福概念が歴史的に見て、古代ギリシャ以来の「運」によるものから、19世紀以降の努力によって「達成」するもの、そして現在は「快的状态」に変わって

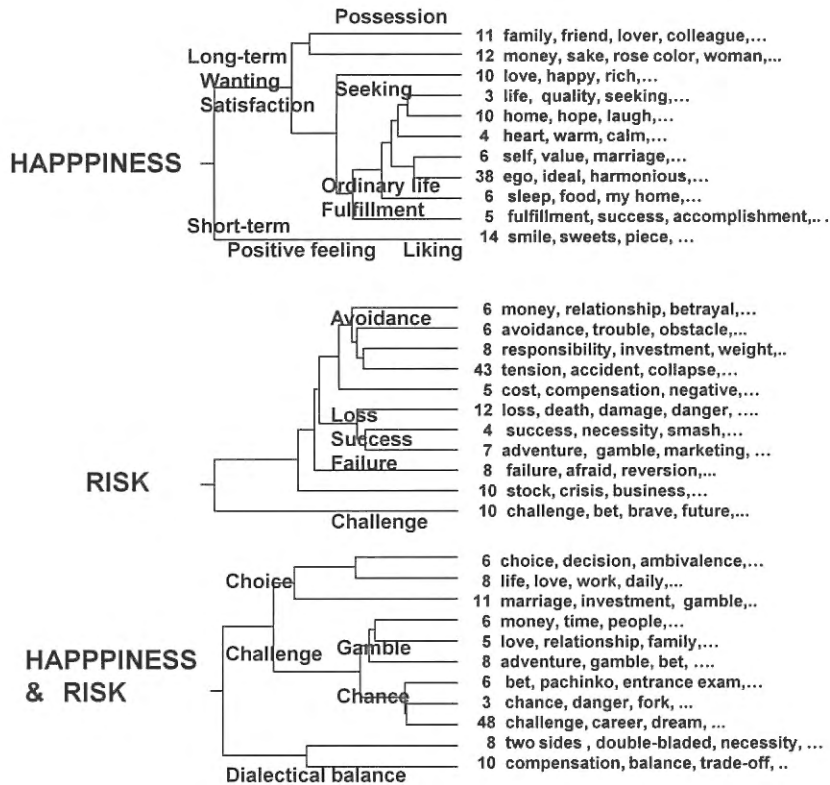


Figure 1 The clustered patterns in a dendrogram using hierarchical clustering: Based on frequency of the co-occurrence of three word association for happiness, risk and the both by undergraduates. The number indicates association frequency

きたことと対応する。

「リスク」に対する連想においては、頻度が高い連想語は、危険 (25.9%)、賭け (9.5%)、挑戦 (9.5%)、冒険 (8.6%)、ギャンブル (8.6%) であった。クラスター分析の結果は、大きく2つに分かれ、「賭け」や「勇気」のような「挑戦」するクラスター (challenge) とそれ以外に分かれ、それ以外のクラスターは、「回避」すべきもの (avoidance)、「損失」 (loss) と「失敗」 (failure)、「成功」 (success)、および「株」などの両面を含むものに分かれた。

最後に、「幸福とリスク」を対提示して連想を求めた場合には、人生 (13.8%)、表裏一体 (11.2%)、結婚 (10.3%)、選択・決断 (9.5%)、ギャンブル (8.6%)、お金 (8.6%)、代償 (6.9%) が連想語の上位を占めた。クラスター分析の結果は、「人生」「結婚」など「選択」 (choice) に関わるクラスター、「お金」「ギャンブル」「賭け」「運命」など「チャレンジ」 (challenge) に関するク

ラスター、「表裏一体」や「代償」「釣り合い」など弁証法的バランス (dialectical balance) に関するクラスターに分かれた。

3通りの連想を全体として考察すると、「幸福」単独の刺激語に対する連想語では、達成やその結果としての快的状态が中心で、人生の成功や生活の肯定的な側面だけが顕在化している。「リスク」単独の刺激語に対する連想語は、避けるべきもの、損失としての否定的イメージが強い。そして、「幸福とリスク」を対提示することによって連想語において、選択や運命などの「表裏一体」の性質や意思決定の役割が顕在化したといえる。このことは、幸福感を研究する際に、快的経験や感情だけに焦点を当てるのではなく、不快な経験やリスクを受け入れたり、乗り越えたりする経験や、快不快がないまぜになっている経験として研究する必要があることを示唆している (Kunzmann & Stange, 2007)。

子安ら (2012) の13カ国の幸福感国際比較調

査¹⁾において、大山(2012)は、文章完成法における「幸福とは……」という定義に対して、述部を短く記入させる方法を用いて、幸福の概念を検討している。ここで、日本人の回答を主要なカテゴリに分類すると、「平凡な生活」(出現比率25.8%)、「幸福な状態」(23.6%)、「家族」(14.3%)、「達成、充実感」(10.9%)などの肯定的な側面が中心であった。一方、選択やリスクの側面は顕在化しにくかった。これは、先に紹介した「幸福」単独を提示した際の連想語とほぼ同様である。また、幸福の概念において肯定的側面が中心であることは、欧米(英国、米国、ドイツ)、中米(メキシコ)においても同様であった。

一方、Uchida and Kitayama(2009)は「幸せ」の特徴やそれを感じたときの生じる結果に関する日米大学生の自由記述結果から、日米共通の意味グループとしては、「一般的な快感情」「個人的達成」「関係性の調和」があることを指摘している。さらに、日本では「一般的な快感情」は「関係性の調和」と意味的に結びつき、米国では、「個人的達成」に結びつくとしている。また、日本では、幸福の記述に否定的意味(例：幸福は長くは続かない)が30%程度含まれており、陰陽思考を反映している(米国は2%)。幸福が不幸と表裏一体と考える見方は、前述した「幸福とリスク」の両語に対する連想語と対応する。ここで、大山(2012)では、幸福の肯定的意味だけが顕在化され、文化差が大きくなかったのに対して、Uchida and Kitayama(2009)においては幸福の肯定的・否定的の両側面の記述が現れたのは、質問の仕方による影響が考えられる。すなわち、幸福の特徴やそれを感じたときに生じる結果までを

含めて記述を求めることは、「幸福とリスク」の両語に対する連想を求めた時と同様に、幸福の意味を多面的に考えることを導くと考えられる。なお、「幸福とは何か(What is happiness)?」というシンプルな質問に対する自由記述を用いて、Lu and Gilmour(2004)は、中国人大学生と米国人大学生における幸福概念の差異を検討している。ここで、人生における幸福と不幸の両価性を考える弁証法的バランスに関する記述は、中国人には見出され、米国人に見出されなかったとしている。さらに、中国人には、幸福は叡智(wisdom)によって得られるという考え方があった。幸福と叡智については、5.において再び論じる。

2.2 幸福とリスクの概念の文化比較

1.1で述べた13カ国の幸福感国際比較調査(子安ら, 2012)¹⁾においては、以下の幸福とリスクに関する2項目を設定していた。

第1に、リスクのない状態を幸福と考える項目「幸せとはリスクのない状態だとおもう」(R1)に対して、5点尺度(5:非常にそう思う~1:まったくそうとは思わない)で評定を求めた。Figure 2aに示すように、リスクがないことを幸福とする考えに肯定する割合が高いのは東アジアであり、中国($M=3.24$, 「非常にそう思う」+「そう思う」を合わせた肯定回答率43%)、つづいて韓国($M=3.00$, 37%)、そして3番目のグループに日本($M=2.74$, 19%)が入る。一方、肯定する人が少ないのは、メキシコ、米国、ニュージーランド、南アフリカ(それぞれ $M_s=2.31, 2.44, 2.45, 2.46$; 肯定回答率16%, 15%, 14%, 18%)であった(以下Ryan法による平均値の差検定, $p<.05$)。Diener et al.(1985)の5項目の人生満足度尺度(Satisfaction With Life Scale: SWLS, 例: 私は自分の人生に満足している)と「幸せとはリスクのない状態だとおもう」(R1)の相関は、中国($r=.32$)が高く、つぎはブラジル($r=.21$)で、全体に相関は低いか無相関であった。日本は無相関であった。同様の結果のパターンは、人生満足度を目的変数とする重回帰分析における偏回帰係数でも見られた(Table 1)。

一方、リスク志向の考え方である「幸せになるためには、リスクがあってもチャレンジする」(R2)は、メキシコ($M=4.15$, 78%)が高く、

1) 京都大学グローバルCOEプロジェクト「心が活きる教育のための国際的拠点」(平成19-23年度)は13カ国(日本、英国、ドイツ、スペイン、メキシコ、ニュージーランド(2010年3月)、韓国、中国、南アフリカ、米国、カナダ、ブラジル、オーストラリア(2011年3月))を対象とするインターネット調査を実施した。対象は、20代の学生、40代、60代の市民の男女で、日本は1221人、他の国は474-641人である。筆者はそのメンバーとして参加した。なお、国別インターネット普及率は、低い国から、南アフリカ8%、中国22%、メキシコ23%、ブラジル38%、他の国はオーストラリア72%から韓国77%の範囲にある(International Telecommunication Union, 2008)。インターネット普及率の低い国における回答者は、社会経済的地位、学歴などの点で恵まれた階層であることに、解釈にあたっては留意する必要がある。

Table 1 Regression analysis predicting life satisfaction scale^a: Standardized partial regression coefficients (and Pearson's correlation coefficients)

Scale	Japan	Korea	China	Australia	Canada	USA	Germany	UK	NZ	Spain	S. Africa	Brazil	Mexico
<i>N</i>	1221	613	641	626	614	542	550	552	582	546	474	612	549
Self-esteem ^b	.47** (.56**)	.12** (.23**)	.13** (.17**)	.56** (.57**)	.51** (.57**)	.43** (.50**)	.42** (.50**)	.49** (.58**)	.52** (.58**)	.40** (.40**)	.50** (.52**)	.32** (.36**)	.43** (.54**)
Risk taking ^c													
R1: Riskless happiness	— (.00)	— (.01)	.28** (.32**)	.11** (.07)	.08* (.03)	— (-.04)	— (.01)	.09** (.05)	— (-.04)	.21** (.14**)	— (-.01)	.24** (.21**)	— (-.04)
R2: Risktaking	— (.15**)	— (.13**)	— (.24**)	— (.11**)	— (.19**)	— (.14**)	— (.19**)	— (.10*)	— (.10*)	— (.17**)	— (.03)	— (.26**)	— (.28**)
Maximization ^d													
M1: Many alternatives	.08** (.15**)	.09** (.13**)	— (.21**)	— (.08*)	— (.16**)	— (.10*)	— (.12**)	.10** (.12**)	— (.08)	— (.09*)	— (.01)	.12** (.27**)	.09* (.20**)
M2: Seeking the best	— (.11**)	.12** (.19**)	.09* (.26**)	.07* (.23**)	.09* (.26**)	.15** (.27**)	— (.13**)	.09* (.28**)	.14** (.25**)	— (.18**)	— (.20**)	— (.12**)	— (.18**)
Regret ^e													
G1: Regret	-.15** (-.23**)	-.19** (-.17**)	— (.09*)	-.08* (-.16**)	— (-.16**)	-.19** (-.29**)	-.25** (-.37**)	-.17** (-.26**)	-.16** (-.25**)	-.17** (-.22**)	-.15** (-.20**)	-.16** (.00)	-.13** (-.21**)
G2: Don't regret	.07** (.28**)	.19** (.33**)	— (.24**)	.11** (.30**)	.09* (.29**)	.10** (.23**)	.13** (.25**)	— (.31**)	— (.24**)	.09 (.23**)	— (.17**)	.14** (.26**)	.13** (.28**)
Assessment ^f													
A1: Critical person	-.07** (-.17**)	— (.00)	— (.24**)	— (-.13**)	— (-.17**)	— (-.15**)	— (.02)	— (-.11*)	— (-.11**)	— (.02)	— (-.07)	— (.12**)	— (.13**)
A2: Reflection	.09** (.02)	.12 (.15**)	— (.25**)	.11** (-.01)	— (.03)	.12** (-.03)	.17** (.00)	— (-.17**)	— (-.13**)	.19** (.05)	.08* (.05)	— (.14**)	— (-.06)
Locomotion ^f													
L1: Start	.09** (.16**)	— (.14**)	.14** (.34**)	— (.25**)	.13 (.33**)	— (.24**)	— (.21**)	.11** (.26**)	— (.19**)	— (.11*)	— (.21**)	— (.21**)	.15** (.30**)
L2: Active	.05* (.22**)	.15** (.30**)	.19** (.35**)	— (.26**)	— (.29**)	— (.14**)	— (.23**)	— (.23**)	— (.21**)	.11** (.24**)	— (.13**)	.13** (.33**)	— (.30**)
<i>R</i>	.61**	.47**	.49**	.62**	.62**	.57**	.58**	.63**	.61**	.53**	.54**	.56**	.60**
Adjusted <i>R</i> ²	.37	.21	.24	.38	.38	.32	.33	.40	.37	.27	.28	.29	.36

Note. * $p < .05$. ** $p < .01$ ^a Life satisfaction scale: Satisfaction with Life Scale (SWLS) (5 items, Diener et al., 1985)^b Self-esteem: Rosenberg self-esteem scale (RSES) (10 items, Rosenberg, 1965)^c R1: Happiness is the absence of risks. R2: I'm ready to take risks in order to be happy.^d M1: Whenever I'm faced with a choice, I try to imagine what all the other possibilities are, even ones that aren't present at the moment.^e M2: I never settle for second best (Maximization scale, Schwartz et al., 2002).^f G1: When I think about how I'm doing in life, I often assess opportunities I have passed up.^g G2: Once I make a decision, I don't look back (Regret scale, Schwartz et al., 2002).^h A1: I am a critical person. A2: I spend a great deal of time taking inventory of my positive and negative characteristics.ⁱ L1: When I decide to do something, I can't wait to get started.^j L2: I enjoy actively doing things, more than just watching and observing (Regulatory mode scale, Kruglanski et al., 2000).

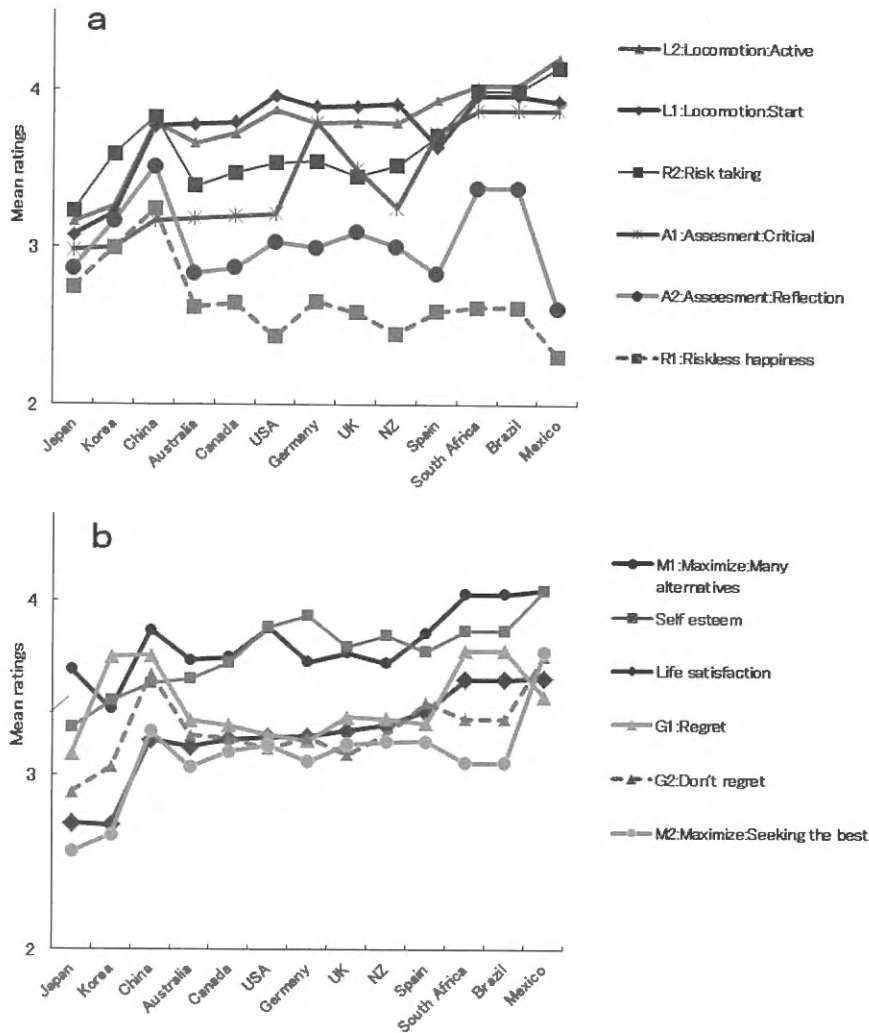


Figure 2 Mean ratings of (a) regulatory mode, (b) decision-making style, life satisfaction, and others for each country by internet survey (Max=5) ($N_s=550\sim1221$)

日本 ($M=3.21$, 39%) は低い。人生満足度との相関は、メキシコ、ブラジル、中国が高く ($r_s=.28, .26, .24$)、南アフリカは低い ($r=-.01$)。

以上をまとめると、「リスクのない状態が幸福」とする考え方は、東アジアに顕著であるが、中南米や西欧にはあてはまらない。一方で、「リスクをとることによる幸福」という考え方は、13カ国中では中南米で顕著であり、日本はこの考え方を取る人が最も少ない。しかし、同じアジアでも中国は「リスクをとることによる幸福」の考え方が多く（肯定回答率 69%）、「リスクをとることによる幸福」と人生満足度との正相関 ($r=.24$) があった。

3. 幸福になるための意思決定

3.1 良い意思決定の規準

人生は、選択の連続であり、幸福になるためには、進学、就職、結婚など人生の重要な決定において、良い決定をすることが重要である（たとえば、竹村, 2008, 2011）。また、商品、食事、旅行先などの選択においても良い意思決定をすることによって、幸せな気分になることができる。ここでは、幸福になるための意思決定の規準として、つぎの5つをあげる。

第一は、効用を最大化するように選択をおこ

なう意思決定である。経済学の規範理論の1つである期待効用理論に基づく合理的な経済人を仮定した考え方である (e.g., von Neumann & Morgenstern, 1944)。たとえば、複数の商品から購入するものを決めるときには、商品の効用（主観的な望ましさ）を比較して、それが最大になるものを選ぶことによって、決定の満足度を高め、幸せな気分になる。効用が不確実で、（主観的な）確率で表現できるときは、効用に（主観）確率をかけた主観的期待効用を最大化することになる (Savage, 1954)。たとえば A 社と B 社のどちらに入社するかを決めるときは、希望部署に配属された場合のうれしさとその可能性を考えることになる。しかし、選択肢が1つずつ現れる場合にはすべての選択肢が同時に利用できず、確率が明確でない場合が多い。そうした状況の中で効用を最大化させようとすることは、時間的、認知的コストが非常に大きくなる (Schwartz, Ben-Haim, & Dacso, 2011)。たとえば、アパートの部屋を探している場合、最高の部屋を探すためにすべての物件を探しつづけることは不可能なため、ある時点で探すことを打ち切るという停止問題が重要になる。

第二の意思決定の規準は満足化 (satisficing) である (Simon, 1956) これは、第一で述べた選択肢が1つずつ出現する時に、その中から選ぶときにつかうことができる規準である。これはあらかじめ適切な要求水準を設定し、その水準を上回る満足できる選択肢に出会ったときに、探索を停止して決定することである。これは効用を最大化する選択肢を選ぶことが、時間や情報の制約からできない決定場面で有効である (たとえば、アパートの部屋や結婚相手を決める場合)。さらに、Schwartz et al. (2011) は、良い決定の規準として頑健満足化 (robust satisficing) を提唱している。そこでは、満足できる結果とは何かを問い、そうした結果を生む選択肢を幅広く探索することの重要性を指摘している

第三は、リスク最小化の規準である。損失の確率と損害の大きさが最も小さい選択肢を選ぶことである。これは、リスクを回避し、できるだけリスクが小さい状態を幸福と見なす考え方である。人は不確定状況下の意思決定において、リスクを回避し、確実性のある選択肢を選んだり、効用や

確率が不明な選択肢を回避する傾向がある。これらは医療、投資、経営等において用いられる規準である。

第四は、後悔最小化の規準である。後悔は、意思決定によって生じた悪い結果を、現実とは異なる良い状況（以前の状況や他の選択肢を選んだ状況）と対比する反実仮想 (counterfactual thinking) によって生じる否定的感情である (e.g., Gilovich & Medvec, 1995)。したがって、決定の満足感や幸福感を低減することになる。そこで、意思決定において、決定後の後悔を予期 (anticipated regret) して後悔がない決定をするようにする。たとえば、転職の誘いを受けた場合、転職（行動）した、あるいは現状維持（行動しない）を選んだ後で、他の選択肢を選んでおけば良かったと後悔することがないようにすることである (Zeelenberg, 1999)。

以上挙げた規準は、竹村 (2011, 2012) が指摘するように、多くの場合、同時に満たすことが難しく、相互に矛盾する。そこで、単一の規準ではなく、複数の観点に基づく制約条件を満たす決定を探るのが、第五に挙げる多重制約充足の規準である (Holyoak & Thagard, 1995)。意思決定は、選択肢から自由に選ぶというよりも、複数の制約を満たすように決定する必要がある。たとえば、進学先を決めるような意思決定は、選択肢から自由に選ぶというよりも、複数の制約（学力、学部学科、学費、所在地など）を満たすように決定する必要がある。人生における意思決定では、相互に拮抗する多くの制約条件があり、それらを調和させたり、制約条件を緩めたりしながら決定することになる。これは、5. で述べる人生の複雑な問題解決において働く叡智に結びつく。また、第1に述べた効用最大化に関わる選択の自由に対して疑問を提起する観点からは、制約を受け入れることが人生を豊かにするという指摘がある (Markus & Schwartz, 2010)。

3.2 意思決定スタイルとしての最大化追求傾向と後悔

3.1 で述べた意思決定の規準のどれを採用するかは、決定の性質に依存するとともに、意思決定における個人差である決定スタイルが影響を及ぼす。ここでは、意思決定スタイルとして、

Schwartz et al. (2002) の 2 つの分類を取りあげる。1 つ目は、すべての選択肢を吟味して、最高の選択肢を求める最大化追求者 (maximizer) である。2 つ目は、満足できる選択肢を求め、選択肢が満足すべき水準を越えていれば、他にもっと良い選択肢があるかどうかは問わずそこで決定する満足者 (satisficer) である。Schwartz et al. (2002) が作成した最大化追求尺度は、最大化を追求する程度を測定する 13 項目からなる (例：何かを決めるときは、あらゆる選択肢を考えてみる)。この尺度には、対極の概念として満足化を仮定しており、尺度得点に基づいて最大追求者と満足化者を判別している。あわせて、後悔尺度 (5 項目、例：自分の人生はうまくいっているだろうかと考えるとき、見送った機会についてあれこれ思うことがよくある) も含めて検討している。

Schwartz et al. (2002) の研究 1 における米国の大学生・市民など異なる 6 サンプルの相関研究では、追求者尺度得点の高い人は Diener の人生満足度得点 ($r = -.27$) や Life Orientation Test (LOT) の楽観主義尺度得点 ($r_s = -.25 \sim -.28$) が低く、後悔尺度得点 ($r = .36 \sim .61$)、Beck の抑うつ尺度得点 ($r_s = .24 \sim .44$) が高いことを見出している。すなわち、最大化追求者は、決定後に後悔しないように、多くの選択肢を吟味するが、満足者に比べて、決定後の後悔が大きい。また、悲観的で抑うつの程度も大きく、人生満足度が低い。これらのことを考慮すると、最大化追求が直接幸福感を低下させると考えるよりも、4.2 で述べるように、その間を媒介する要因を検討する必要がある。

また、Bruine de Bruin et al. (2007) は、米国の一般市民を参加者として最大化追求者得点と 7 つの意思決定課題得点の相関を調べたところ、Decision Outcome Inventory とは $-.26$ 、under/over confidence 課題とは $-.21$ など負の相関があった。このことは、最大化追求決定スタイルは、意思決定のパフォーマンスを低下させる可能性が考えられる。

一方、Diab, Gillespie, and Highhouse (2008) は、Schwartz et al. (2002) の追求者尺度における構成概念上の問題点を指摘している。そして、Schwartz らの尺度から 3 項目 (何かを決めるときは、あらゆる選択肢を考えてみる；私は 2 番目

によりもので満足することはない；何をするにしても自分に最高の規準を求める) を残し新たに 6 項目を加えて、追求者傾向の新尺度を構成した。米国の大学生 191 名における従来の尺度、新尺度と関連指標との相関をみると人生満足度 ($r_s = -.24, .04$) 後悔 ($r_s = .45, .27$)、IPIP 神経症傾向尺度 ($r_s = .24, .01$) であった。新尺度に基づけば、追求者傾向は、必ずしも人生満足度を低下させるなどのネガティブな影響を引き起こしてはいない。

日本においては、磯部ら (2008) が、307 人と 163 人の大学生を対象とした 2 回の調査を実施し、Schwartz et al. (2002) の追求者尺度には、日本文化には適合しない項目があることを指摘し、日本版の後悔・追求者尺度を作成している。さらに、全国の市民 944 人から回答を得て、追求者尺度と後悔尺度の相関 ($.28$)、自分と他者への信頼度との相関 ($.17, .21$)、追求者尺度得点が増加によって低下することを見出している (久富ら, 2005)。一方、都築 (2008) の調査 2 は、この日本版の尺度を用いて、155 人の大学生を対象に調査を実施し、追求者尺度が自己肯定意識の尺度の充実感、自己実現、自己受容と正相関 ($r_s = .26, .42, .38$) があること、追求者尺度と 2 種類の後悔尺度 (購買と人生) がほぼ無相関 (それぞれ $r_s = .06, .15$) であることを示している。そして、Schwartz et al. (2002) との相違があることから、文化差があることを指摘している。

また、Inglehart et al. (2008) は、世界価値観調査の結果に基づいて、個人の選択の自由が拡大した国は幸福感が向上することを指摘した上で、選択の自由は幸福な社会にとって重要であると指摘している。さらに、Markus and Schwartz (2010) も最大化追求をめぐる選択の自由と幸福感の関係にも文化差があることを指摘している。相互協調的な自己観をもつ西欧圏や、米国においても低学歴の労働者階級では、選択の意味や制約が異なるためである。

そこで 3.3 では、幸福感国際比較調査 (子安ら, 2012)¹⁾ における、意思決定と幸福感に関わる項目の平均評定値 (5：非常にそう思う～1：まったくそうは思わない) と人生満足度尺度 (Diener, et al., 1985) との相関係数および偏回帰係数に基づいて検討する。項目としては、主観的

幸福感に影響を及ぼすと考えられる自尊心、意思決定スタイルに関わる追求者尺度、そして意思決定の結果にともなう後悔を取りあげる。ところで、Diener and Diener (1995) は、31 カ国の大学生対象の調査を行い、自尊心と人生満足度との相関は、米国（男女それぞれ $r_s = .56, .60$ ）などの北米、西欧など個人主義傾向の強い国は、日本（ $r_s = .34, .44$ ）やインド（ $r_s = .40, .08$ ）などの集団主義傾向の強い国に比べて、高いという文化差を示している。ただし、彼らの研究は、Table 1 に示すデータとは項目が異なり、自尊心が「自分に対する満足度」についての1項目であり、対象が大学生だけである。そこで、3.3 では、まず各国の人生満足度と自尊心のレベル、および両者の相関を調べる。そして、両者の相関は、北米、西欧などが高く、東アジアが低いのかを検討する。

3.3 意思決定スタイルと人生満足度の文化差

Figure 2b で示す通り、人生満足度は、メキシコ（5点尺度、 $M = 4.07$ ）が他国よりも有意に高く、日本と韓国（ $M_s = 2.72, 2.73$ ）が有意に低い（以下も Ryan 法による平均値の差検定、 $p < .05$ ）。自尊心尺度得点（self-esteem: Rosenberg, 1965）も同様の傾向で、メキシコ（ $M = 4.07$ ）が他国よりも有意に高く、日本（ $M = 3.28$ ）が有意に低い。Table 1 に示すように、人生満足度と自尊心の相関は英国、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、日本が高い（ $r_s = .58, .58, .57, .57, .56$ ）。これらの国よりも米国はやや低く .50 である。一方、中国、韓国は低かった（ $r_s = .17, .23$ ）。さらに、重回帰分析を用いて、人生満足度を目的変数として、意思決定スタイルに関わる 11 の説明変数をステップワイズで投入したところ、中国と韓国以外は、自尊心が第 1 に投入され、標準化偏回帰係数も高い。このように人生満足度と自尊心の平均評定値が中南米で高く、日本や韓国で低いという結果は従来の結果と対応している（e.g., Diener & Diener, 1995; Inglehart et al., 2008）。また、人生満足度と自尊心の相関、偏回帰係数が、西欧で高く、東アジアが低いという結果も、Diener and Diener (1995) の結果と対応している。ただし、日本の相関、偏回帰係数が高い点が異なる。

Schwartz et al. (2002) の最大化追求に関わる

代表的項目で、「何かを決めるときは、あらゆる選択肢を考えてみる」(M1) は、メキシコ、ブラジル、南アフリカが平均評定値と肯定回答率が高く（ $M_s = 4.06, 4.04, 3.95$, 肯定回答率 86%, 77%, 80%）、韓国は低い（ $M_s = 3.38, 48\%$ ）。日本（ $M = 3.6, 60\%$ ）は下から 2 番目に低いグループである。Table 1 に示した人生満足度との相関は、正相関のブラジルから無相関の南アフリカまでであった（ $r_s = .27 \sim .01$ ）。同じく最大化追求の項目「私は 2 番目によいもので満足することはない」(M2) は、メキシコが高く（ $M = 3.71; 68\%$ ）、日本と韓国は低い（ $M_s = 2.56, 2.66; 12\%, 28\%$ ）。人生満足度との相関を見ると、英国、米国、カナダ、中国が高く（ $r_s = .28, .26, .26, .26$ ）、日本は最も低い（ $r = .11$ ）。これらのパターンは、偏回帰係数でもほぼ同様である。

このように「あらゆる選択肢を考え」、「2 番目によいものでは満足しない」という追求者の決定スタイルは、どの国においても人生満足度と弱い正の相関、偏回帰係数が見出された。また、日本人や韓国人は、人生満足度が低いだけでなく、最大化追求傾向も低く、一方、メキシコやブラジル人は人生満足度と最大化追求傾向の両方が高かった。人生満足度との関連性に着目すると、「あらゆる選択肢を考える」との相関は、中南米において正の相関や偏回帰係数を示し、「2 番目によいものでは満足しない」は英国と北米、ニュージーランドとオーストラリアそして中国において正相関が高く、偏回帰係数は有意である。以上の結果は、追求者の決定スタイル自体は、Schwartz (2004) や Iyenger, Wells, and Schwartz (2006) が指摘しているようには、人生満足度を低下させていない。本研究の以上の結果のひとつの解釈として、最大化追求によって、考慮に入れる選択肢をふやすことが、機会コスト（ある選択肢を選んだ時に、他の選択肢を選んだ時に得られる機会を失うこと）を高めて、後悔が大きくなることが考えられる（全ての国の全体データにおける最大化追求 (M1, M2) と後悔項目 (G1) 間にはそれぞれ正相関（ $r_s = .21, .12$ ）がある）。そして、後悔によって、人生満足度が低減すると考えられる。

そこで、つぎに後悔の項目「自分の人生はうまくいっているだろうかと思うときに、見送った機会についてあれこれ考えることがある」(G1)

を検討する。Figure 2b に示すとおり平均評定値と肯定回答率はブラジル、中国、韓国、南アフリカが高く ($M_s=3.72, 3.68, 3.68, 3.5$; 64%, 67%, 68%), 一方、日本、ドイツ、米国は低い ($M_s=3.12, 3.20, 3.23$; 38%, 36%, 50%)。Table 1 に示す人生満足度との相関は、中程度の負相関のドイツから低い正相関の中国の範囲 ($r_s=-.37\sim.09$) で、日本 ($r=-.28$) も含めて中国とブラジル以外では負相関がある。偏回帰係数は、中国とカナダ以外は負である。一方、後悔しない態度「いったん決めたら振り向かない」(G2) は、平均評定値や肯定回答率はブラジル、中国が高く ($M_s=3.68, 3.58$; 51%, 56%), 日本は低い ($M=2.90$; 27%)。韓国も下から 2 番目のグループである ($M=3.06$; 36%)。人生満足度との相関は、高い韓国から低いメキシコの範囲 ($r_s=.33\sim.17$) で、日本 ($r=.28$) も含めすべての国で正相関がある。すなわち、決定後の後悔は人生満足度を低下させ、後悔しない態度は人生満足度を高めているといえる。なお、日本人は、人生を後悔する傾向も弱く、「いったん決めたら振り向かない」という後悔しない傾向も弱いという一見矛盾している結果であった。しかし、相反する両項目は弱い負相関 ($-.14$) がある。また、後悔する傾向は、人生満足度や自尊心と負相関 ($-.23, -.24$)、一方、後悔しない傾向は人生満足度や自尊心と正相関 ($.28, .31$) があった。後悔する傾向が人生満足度を低下させ、後悔しない傾向が人生満足度を上昇させていることは、他の国でも共通している。偏回帰係数の符号は、後悔する傾向 (G1) は 13 カ国中 11 カ国が負で、後悔しない傾向 (G2) は 7 カ国が正であった (他の国では、説明には寄与していなかった)。

さらに、後悔する傾向 (G1) が後悔しない傾向 (G2) よりどれだけ評定値が大きいかを見るために平均評定値の差を全体の標準偏差で割る Cohen の d (効果量) を算出したところ、差が大きいのは韓国、ブラジル、日本 ($d_s=.48, .26, .15$)、差がないのは米国、カナダ、ドイツ ($d_s=.05, .05, -.01$) で、逆に後悔しない方が大きいのはメキシコ ($d=-.16$) であった。このことは、韓国や日本は後悔する傾向が強いのに対し、北米にはその傾向が弱く、メキシコは後悔しない傾向があることを示している。

なお、日本人や台湾人が、米国人に比べ、自尊心をはじめとする自己評定を低く評定したり、中点評定にすることは知られている (Chen, Lee, & Stevenson, 1995; Heine et al., 1999; Oishi, 2010; Yamaguchi et al., 2008)。しかし、ここで相関、偏回帰係数や肯定回答率を合わせて検討した結果は、単なる反応バイアスではない傾向が示されている。

4. 幸福感和自己制御モード

4.1 自己制御モード

幸福を目標として行動するためには、意思決定に加えて、目標に照らして自分の状態を評価し、行動を変更し、実行する能力が重要である。Higgins, Kruglanski and Pierro (2003) は、目標志向的活動を支えている自己制御方略として、2 つのモード、移行 (locomotion) と評価 (assessment) を提唱している。移行モードは現状から目標に向けて行動を開始することに関わる自己制御である。一方、評価モードは目標、手段、現状の質を他の代替案と比較、評価することである。また、自己制御の焦点には促進 (promotion) と抑制 (prevention) がある。ここでは、移行と評価モードの傾向尺度 (Kruglanski et al., 2000) の代表的項目を用いて、それらが人生満足度とどのように関連するかを検討する。あわせて、評価モードに関わる批判的思考態度に着目する。

4.2 幸福感和制御モードの文化比較

Higgins (2008) の自己制御のモードと制御適合 (regulatory fit) の考え方によれば、文化・社会・組織によって利用されやすい方略があり、環境との適合のあり方として規定される。Higgins, Pierro, and Kruglanski (2008) の大学生を対象とした 9 カ国の比較研究の結果は、移行モードでは、日本が最も低く、イタリアとスペインが高いこと、評価モードは、イスラエルが高く、つづく第二グループに日本は位置し、一方、イタリア、スペイン、インドが低いことを見出している。そして、日本では、評価モードが移行モードよりも利用されやすく、イタリアは日本と逆であるとしている。ここで、日本において、評価モードが利用されやすいのは、日本人は、自分に批判的な目を向けて、

反省し、自己研鑽する傾向性があるためと考えられる (Heine et al., 1999)。これは、3.3 で述べた日本において、後悔する傾向が高いこととも対応する。

そこで、自己制御モードの文化差と幸福感の関係を明らかにするために、幸福感国際比較調査 (子安ら, 2012)¹⁾ において実施した項目に基づいて検討する。Figure 1b に示す評価モードに関する項目の「私は批判的な人間だ」(A1) についての平均評定値や肯定回答率は、ブラジル、メキシコ、ドイツ、スペインが高く ($M_s=3.87, 3.87, 3.80, 3.73$; 肯定回答率 73%, 76%, 74%, 68%)、日本と韓国は低い ($M_s=2.98, 3.00$; 29%, 33%)。また、人生満足度との相関は、中国は正相関 ($r=.24$) があつたのに対して、カナダと日本は負の相関 ($r_s=-.17$) があつた。日本は、自分を批判的であると捉えている人が他国よりも少なく、その人たちの人生満足度は低い傾向が見られた。一方、自らを批判的と捉える人が多いブラジル、メキシコでは、自らを批判的であると捉えることと人生満足度との弱い正相関があるが、ドイツやスペインでは相関はみられなかった。偏回帰係数を見ると、日本が弱い負 ($\beta=-.07$) であること以外は、説明には寄与していなかった (Table 1)。

また、評価モード項目である内省的思考 (reflection) に関わる「自分の良いところや悪いところをいろいろと考えることにたくさん時間を使っている」(A2) の平均評定値と肯定回答率は、中国とブラジルが高く ($M_s=3.51, 3.38$; 58%, 54%)、メキシコは低い ($M=2.61$; 22%)。日本は低い方から 2 番目のグループであつた ($M=2.86$; 26%)。人生満足度との関係は正相関の中国から負相関の英国の範囲 ($r_s=.25 \sim -.17$) で正または負の弱い相関あるいは無相関であつた。偏回帰係数は、13 カ国中 7 カ国が弱い正であり、他の国では説明には寄与していなかった。

このように、評価モード項目、とりわけ批判的思考と人生満足度の関係については、強い関連性は見られていない。また、文化差についても Heine et al. (1999) の指摘とは異なり、日本人が評価モードである自分のよい点や悪い点を内省する傾向は他国に比べて低かつた。また、自分を批判的な人間であるとする傾向も低かつた。そこで、4.3 では、この点をさらに検討するために、24

項目の制御モード尺度と 19 項目の批判的思考態度尺度を用いて人生満足度との関連を検討する。

一方、現状から目標への行動開始に向けた自己制御である移行モード項目「私は何かをしようと決めると、それを始めるのが待てない」(L1) の平均評定値と肯定回答率は、高い国は南アフリカ、ブラジル、米国、メキシコ ($M_s=4.09, 3.97, 3.97, 3.93$; 85%, 76%, 81%, 78%) で、低い国は日本 ($M=3.08, 32\%$)、つづいて韓国 ($M=3.22$; 41%) であつた。人生満足度との相関は、高い中国から低いスペインの範囲 ($r_s=.34 \sim .11$) ですべて正の相関があつた。偏回帰係数は 5 カ国で弱い正、他の国は説明に寄与していなかった。同じく移行モード項目「物事を見たり観察したりするよりも自分で積極的にする方が好きである」(L2) は、メキシコが非常に高く 9 割が肯定回答 ($M=4.21, 90\%$) をしているのに対し、日本と韓国は低い ($M_s=3.16, 3.26$; 36%, 44%)。人生満足度との相関は、高い中国から低い南アフリカまでの範囲 ($r_s=.35 \sim .13$) ですべての国において正の相関があつた。偏回帰係数は 5 カ国で弱い正、他の国は説明に寄与していなかった。また、Hong, Tan, and Chang (2004) による中国系のシンガポール人の大学生 143 人に対する調査では、Diener の人生満足度と移行モード、評価モードとの相関 (.07, -.08) は低かつた。

以上の結果に基づいて考えると、移行モードは、日本や韓国よりも、中南米や西欧諸国において利用されやすい方略である。また、人生満足度とは弱い正の関連性をもつと考えられる。

4.3 日本の大学生と社会人の幸福感に及ぼす制御モードと批判的思考態度の影響

人生満足度に及ぼす制御モード、決定方略、批判的思考態度の影響を明らかにするためには、複数の項目からなる尺度を用いて測定を行い、より詳細な因果関係の分析をする必要がある。

そこで、楠見 (2012b) では、2.2 と同じ 116 名の日本人大学生に対して、批判的思考態度質問紙改訂版 (平山・楠見, 2004 の改訂版 19 項目, $\alpha=.86$)、移行と評価モードの傾向尺度 (Kruglanski et al., 2000, それぞれ 12 項目 $\alpha_s=.76, .73$)、最大化追求尺度 (Schwartz et al., 2002 の 13 項目から日本文化と適合しない 3 項目を除

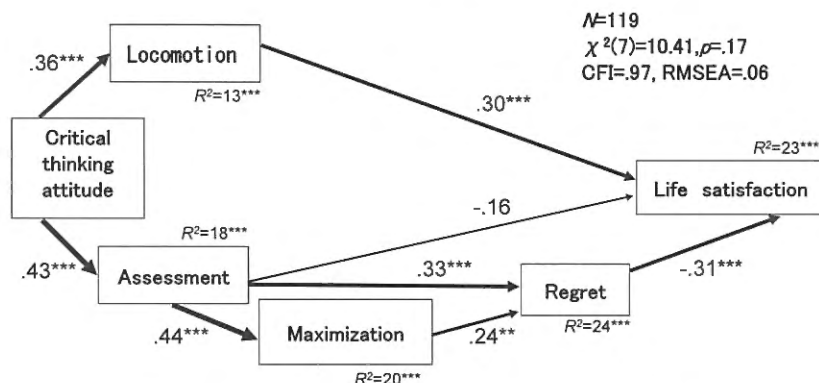


Figure 3 Standardized path coefficients for model of life satisfaction

いた10項目、 $\alpha=.64$ ）、後悔尺度（Schwartz et al., 2002の5項目、 $\alpha=.74$ ）、人生満足度尺度（Diener et al., 1985の5項目、 $\alpha=.83$ ）に関して、5段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）を求めた。人生満足度との関係は、後悔と評価モード、批判的思考態度とは負相関（ $r_s=-.37$, $-.25$, $-.15$ ）、移行モードとは正相関（.27）があった。ここで、批判的思考態度と追求尺度は正相関（.33）、追求尺度と後悔尺度も正相関（.39）である。項目の内容が若干異なるため単純には比較できないが、追求尺度と後悔尺度の相関は、磯部ら（2008）の大学生データ（ $r=.20$ ）久富ら（2005）の市民データ（ $r=.25$ ）、都築（2008）の大学生データ（ $r_s=.06\sim.15$ ）と比べると高い。

さらに、AMOS (ver. 16) を用いてパス解析を行ったところ Figure 3 のような結果が得られた（ $\chi^2(7)=10.41$, $p=.17$, $CFI=.97$, $RMSEA=.06$ ）。批判的思考態度は、移行と評価の両モードの傾向性を高めていた。さらに、移行モード傾向は主観的幸福感を直接高めていた（ $\beta=.30$ ）のに対し、評価モード傾向は主観的幸福感をやや弱めていた（ $\beta=-.16$ ）。特筆すべきことは、評価傾向は、最大化を追求する傾向を高め、その結果、後悔する傾向が高まるパス（ $.44 \times .24=.11$ ）と、後悔を直接高めるパス（.33）があり、両者の結果として主観的幸福感が下がったことである（間接パスの影響合計は $-.13$ ）。これは、批判的思考態度は、主観的幸福感を直接下げるといふより評価モードによる後悔を媒介して生じることを示している。なお、Pierro et al. (2008) も、評価モードが後悔および反実仮想を高めることを、イタリア人大

学生対象の調査に基づいて明らかにしている。

また、楠見（印刷中）は800人の20-60代の全国の会社員と教員男女、および別の800人の20-50代の全国の有職者男女にインターネット調査したところ、人生満足度尺度と批判的思考態度との相関はそれぞれ.06 .15、とやや低く、移行モード尺度とは.24 .27、の正相関があるのに対し、評価モード尺度との負相関は $-.08$, $-.04$ 、と低かった。2つの調査結果は、批判的思考態度や評価モードと幸福感との直接の関連は弱いことを示している。

以上の複数の日本の大学生と社会人を対象とした調査結果は、評価モード傾向や批判的思考態度と幸福感の間には、直接的な強い負相関を示していない。そして、評価モード傾向や批判的思考態度は、決定後に後悔を引き起こす場合に人生満足度を低下させると考えられる。そこで、5. では、批判的思考態度が幸福感を高めるプロセスとして、批判的思考態度に支えられた叡智が、人生における良き意思決定を導き、幸福感を高めることについて論じる。

5 幸福感和叡智

5.1 批判的思考と実践的知能に支えられた叡智

批判的思考の態度やスキルは、必要な情報を探求し、証拠に基づいて客観的に評価し、論理的、熟慮的に意思決定を行うことを支えている。これは良き生活能力（good life-ability）や市民リテラシー（civil literacy）の基盤となる叡智として、人生における良い意思決定や社会的な問題解決を

促進し、幸福感を高めることが考えられる（たとえば、楠見，2011b）。

叡智は、こうした人生における良い意思決定や社会的問題解決を支える知識として位置づけることができる。Kunzmann and Baltes (2005) は、叡智を、人生における経験によって獲得される深く広い知識と理解に基づく、高い水準と価値を実現した知性として定義している。これは、Erikson (1959) のように、叡智を、心理的危機を乗り越えた人格発達における成熟として捉える見方とも通じる。したがって、叡智の獲得は、人生の究極の目標として、幸福の実現とともに位置づけることができる。

さらに、Baltes らの研究グループは、叡智を、人生で遭遇する困難な問題を解決するための「人生に関する根本的、実践的考慮について熟達化」(expertise in the fundamental pragmatics of life) として定義している (e.g. Kunzmann & Baltes, 2005)。彼らは、人生に関わる問題解決課題を支える根本的実践的知識としてつぎの5つの規準を設定している。(a) 人の性質や人生についての豊富な事実知識、(b) 人生の問題解決のための豊富な方略知識、(c) 人生の多様な文脈の理解に基づく判断、(d) 個人・社会・文化の差異の理解に基づく相対主義、(e) 個人の知識の限界を踏まえた不確定性への対処である。これらの5つの規準は、人生の問題解決における高いレベルの意思決定を支える知識やスキルである。これは、自分だけでなく、他者にアドバイスをしたり、社会を幸福にするための高次の知性と捉えることができる。

一方で、叡智は、4. で述べた批判的思考と同様に、人生の現実を吟味することによって、幸福感を低減させるという考え方がある。しかし、そうではないことをつぎに述べる。

Bergsma and Ardelt (2011) は、先行研究に基づいて叡智の3次元（認知、内省、慈悲）を設定して、計39項目を構成し、オランダの7,037名の市民を対象としてネット調査を実施した。「今日はどのくらい幸福ですか」「過去3か月において、すべてのことを考えた時にどのくらい幸福ですか」について10段階評定を求めた。内省項目13項目には、異なる立場から物事を見たり、主観を排する傾向（例：私はいつもすべてのことが

らから問題を見る）があった。叡智の内省次元尺度と2つの幸福感項目との相関は、今日の幸福(.35)、過去3か月の幸福(.38)であった。このように叡智と幸福は矛盾するものではなく、相互にポジティブな影響関係を持つと考察している。すなわち、叡智は人生の難しい問題への対処を促進し幸福を導き、一方で、肯定的感情や主観的幸福が高いことは、内省や新たな世界の探索を促進し、叡智を高めるとしている。また、ここでの叡智の内省次元項目は、批判的思考の態度項目とも共通する。

ここで批判的思考態度は、病気や被災による困難な状況を乗り越えるための叡智として、適切な知識の獲得や発揮を支えている。楠見・三浦・小倉 (2009) は、がんとアトピー性皮膚炎の患者と家族1,089人に調査したところ、批判的思考態度（平山・楠見，2004）の4つの下位尺度（探究心、客観性、証拠重視、論理的思考）と病気への適応（5項目、例：病気についてくよくよと考えない、良くなると信じている、病気を克服しようと思う）には正相関（.45～.23）がみられた。また、パス解析の結果は、批判的思考の態度が科学リテラシーを高め、さらに、病気の知識、食生活の知識を高め、その結果として病気への適応尺度得点（例：病気についてくよくよ考えない、良くなると信じている、何でも前向きにやろうと思う）を高めるというパスを見いだした。

さらに、楠見・三浦・小倉 (2012) は、東日本大震災における原発事故による放射線汚染に関するリスク情報の理解に批判的思考態度がどのように影響するかを、被災県、首都圏、関西圏の計1,752人の一般市民を対象に震災半年後と1年後にネット調査をおこなった。その結果、批判的思考態度はメディアリテラシーを向上させることを通して、知識や自発的な情報収集を促進し、リスク対処行動に影響を及ぼしていることを示している。

叡智をこうした人生における問題解決や困難克服のための知性と考え、叡智は実践的知能 (Sternberg, 1997) との関係で捉えることができる。叡智は、実践的知能を、個人の幸福だけでなく他者や社会の幸福のために、知識を適用・活用し、実行・達成するために働かせるものである。ここでの知識は実践経験から獲得される暗黙知

(tacit knowledge) であり、自己管理（自分をコントロールするメタ認知スキル）、他者管理（対人関係に関するヒューマンスキル）、タスク管理（仕事遂行のためのテクニカルスキルや仕事のビジョンを立てるコンセプトチュアルスキル）に分けることができる（Katz, 1955; 楠見, 2012a; Wagner, 1987）。実践的知能でとくに重視されるのは、メタ認知や内省的判断であり、自己の状態をモニタリングし、処理スピードだけではなく、バランスやコントロールを重視した認知処理をおこなうことである。

4.2でも紹介した楠見（印刷中）では、職場における実践知の獲得と人生満足度との関係を、400人の会社員と400人の教員を対象として調査をしている。その結果、それぞれの人生満足度と実践知獲得レベルの自己評価との相関は、仕事において高いレベルの目標を立てて実行するためのコンセプトチュアルスキルとは.22 .12、同僚などと良い人間関係を形成するためのヒューマンスキルとは.20 .19であった。

このように叡智を支える実践知の獲得は、人生の満足度に結びついていた。一方で、叡智に関わる批判的思考態度は、行動を起こす移行モードに比べて、評価モードを強めるおそれがある²⁾。それは、効用の最大化追求を引き起こし、自分の行動に厳しい評価を繰り返すことによって、後悔が大きくなり、人生満足度を低下させることになる（Figure 3）。また、4.2で述べたように日本人には評価モードが移行モードよりも強い傾向が指摘されていた。こうした日本人の評価モードが優勢な傾向性を踏まえて、批判的思考態度が人を幸福に導くには、長年の経験を通して形成した叡智がカギとなる。人生の文脈における多重の制約を理解し、満足できる解は何かを明確にしつつ幅広く選択肢を吟味し、そして不確実性に関する知識や

スキルを活用して、人生や社会の問題解決のための行動を起こすことが必要である。

6. ま と め

本論文は、主観的幸福感と意思決定を、幸福とリスクの概念、決定スタイルと自己制御モードの文化差の点から検討することを目的とした。2. では、幸福とリスクの概念を明らかにするために、「幸福とリスク」を刺激語とする連想法によって検討した。そして日本において幸福とリスクの概念が表裏一体となっている特徴を明らかにした。3. では、幸福になるための意思決定における5つの規準を検討した。そして、13カ国の国際比較調査に基づいて、日本人は、意思決定スタイルとしての最大化追求傾向、それによる後悔と人生満足度が他国に比べて低いことを明らかにした。4. は、自己制御モードと幸福度の関連の文化差を国際比較調査と日本の大学生・社会人のデータを基づいて検討した。とくに、批判的思考態度が評価モード傾向を高め、最大化追求を起こし、後悔を大きくして人生満足度を低下させるという間接パスと直接パスを見出した。そして5. では、叡智が、批判的思考態度と実践的知能を適切に働かせて、人生における問題を解決し、幸福度を高めていることを、日本の社会人のデータによって示した。

今後の課題のひとつは、人々が、コミュニティの一員として、叡智や批判的思考を用いて判断をすることが、人生そして社会の問題を協同して解決し、幸せな人生とよりよい社会を築くために、どのように寄与するのか、またその文化差はどのようにあらわれるのかを明らかにすることである。とくに、こうした文化差に関しては、その文化を生み出す心理的要因（たとえば、相互独立的自己観—相互協調的自己観, Markus & Kitayama, 1991; 集団主義—個人主義, 不確実性の回避, 権力格差, Hofstede, 1991）や社会生態学的要因（たとえば、関係流動性, 竹村・佐藤, 2012）を含めた包括的検討が必要である。

謝 辞

本研究は京都大学グローバル COE リーダー子安増生教授を代表とする幸福度の国際比較調査に基づく調査

2) 移行モード傾向が幸福度を高め、評価モード傾向が幸福度を低める可能性は、Higgins (2008) が指摘したように、制御モードが個人を動機づけるパーソナリティ (Big V) のありかたの点からも考察できる。すなわち、Higgins は、移行モードは外向性 (断行性, 活動性, 刺激希求性), 誠実性 (達成追求, 自己鍛錬) に関連し、評価モードは神経症傾向 (自意識, 傷つきやすさ, 不安), 開放性 (行為, アイデア, 価値) に関連するとしている。したがって、評価モード傾向の強さは、神経症傾向を高めることによって、幸福度を低下させることが考えられる。

のデータを利用しました。ここに記して感謝します。本研究の一部は、文部科学省科学研究費基盤研究 A (課題番号 23243071) の補助を得ました。

また、本論文にコメントいただいた竹村和久、都築誉史、子安増生、内田由紀子、小宮あすか、荻原祐二の諸氏に感謝します。

文 献

- Bergsma, A., & Ardel, M. (2011). Self-reported wisdom and happiness: An empirical investigation. *Journal of Happiness Studies*, DOI: 10.1007/s10902-011-9275-5.
- Bruine de Bruin, B., Parker, W., Andrew, M., & Fischhoff, B. (2007). Individual differences in adult decision making competence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92 (5), 938-956.
- Chen, C., Lee, S. Y., & Stevenson, H. W. (1995). Response style and cross-cultural comparisons of rating scales among East Asian and North American students. *Psychological Science*, 6, 170-175.
- Diab, D. L., Gillespie, M. A., & Highhouse, S. (2008). Are maximizers really unhappy? The measurement of maximizing tendency. *Judgment and Decision Making*, 3, 364-370.
- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. L., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, culture, and subjective well-being: Emotional and cognitive evaluations of life. *Annual Review of Psychology*, 54, 403-425.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International University Press. 西平直・中島由恵(訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.
- Furnham, A. F. (1988). *Lay theories: Everyday understanding of the problems in the social sciences*. Pergamon Press. 田名場 忍・細江達郎・田中場美雪(訳) (1992) しろうと理論——日常性の社会心理学 北大路書房.
- Gilovich, T., & Medvec, V. H. (1995). The experience of regret: What, when, and why. *Psychological Review*, 102, 379-605.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, 106, 766-794.
- Higgins, E. T. (2008). Culture and personality: Variability across universal motives as the missing link. *Social and Personality Psychology Compass*, 2, 608-634.
- Higgins, E. T., Kruglanski, A. W., & Pierro, A. (2003). Regulatory mode: Locomotion and assessment as distinct orientations. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 35, pp. 293-344). New York: Academic Press.
- Higgins, E. T., Pierro, A., & Kruglanski, A. W. (2008). Re-thinking culture and personality: How self-regulatory universals create cross-cultural differences. In R. M. Sorrentino, & S. Yamaguchi (Eds.), *Handbook of motivation and cognition across cultures* (pp. 161-190). San Diego, CA: Academic Press.
- 平山るみ・楠見 孝 (2004) 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響: 証拠評価と結論導出課題を用いての検討 教育心理学研究, 52 (2), 186-198.
- 久富哲兵・磯部綾美・大庭剛司・松井 豊・宇井美代子・高橋尚也・竹村和久 (2005) 安心と不安の社会心理 (IV) —— 意思決定スタイルと信頼との関連性 —— 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 230-231.
- Hofstede, G. H. (1991). *Cultures and organizations: software of the mind*. New York: McGraw-Hill Book. 岩井紀子・岩井八郎(訳) (1995) 多文化世界: 違いを学び共存への道を探る 有斐閣.
- Holyoak, K. J., & Thagard, P. R. (1995). *Mental leaps: Analogy in cognitive thought*. Cambridge, MA: MIT Press. 鈴木宏昭・河原哲雄(監訳) (1998) アナロジーの力: 認知科学の新しい探求 新曜社.
- Hong, R. Y., Tan, M. S., & Chang, W. C. (2004). Locomotion and assessment: Self-regulation and subjective well-being. *Personality and Individual Differences*, 37, 325-332.
- Inglehart, R., Foa, R., Peterson, C., & Welzel, C. (2008). Development, freedom, and rising happiness: A global perspective (1981-2007). *Perspectives on Psychological Science*, 3, 264-285.
- International Telecommunication Union (2008). ICT Data and Statistics. <http://www.itu.int/ITU-D/ict/statistics/> (2012. 4. 5)
- 磯部綾美・久富哲兵・松井 豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008) 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究, 79, 453-458.
- Iyengar, S. S., Wells R. E., & Schwartz, B. (2006). Doing better but feeling worse: Looking for the “best” job undermines satisfaction. *Psychological Science*, 17, 143-150.
- Katz, R. L. (1955). Skills of an effective administrator.

- Harvard Business Review*, 33 (1), 33-42.
- 子安増生・楠見 孝, Carvalho, M. K., F., 橋本京子・藤田和生・鈴木晶子・大山泰宏・Becker, C., 内田由紀子, Dalsky, D., Mattig, R., 櫻井里穂・小島隆次 (2012) 幸福感の国際比較研究：13カ国のデータ心理学評論, 55, 70-89.
- Kruglanski, A. W., Thompson, E. P., Higgins, E. T., Atash N. N., Pierro, A., Shah, J. Y., & Spiegel, S. (2000). To "do the right thing" or to "just do it": Locomotion and assessment as distinct self-regulatory imperatives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 793-815.
- Kunzmann, U., & Baltes, P. B. (2005). The psychology of wisdom: Theoretical and empirical challenges. In R. J. Sternberg, & J. Jordan (Eds.), *Handbook of wisdom: Psychological perspectives* (pp. 110-135). New York: Cambridge University Press.
- Kunzmann, U., & Stange, A. (2007). Wisdom as a classical human strength: Psychological conceptualizations and empirical inquiry. In A. D. Ong, & M. H. M. van Dulmen (Eds.), *Oxford handbook of methods in positive psychology* (pp. 306-322). Oxford, UK: Oxford University Press.
- 楠見 孝 (1996) 感情概念の認知モデル 土田昭司・竹村和久(編) 感情と行動・認知・生理 (pp. 29-54.) 誠信書房.
- 楠見 孝 (2011a) 批判的思考とは：市民リテラシーとジェネリックスキルの獲得 楠見 孝・子安増生・道田泰司(編) 批判的思考とその育成：学士力, ジェネリックスキル, 社会人基礎力の基盤 (pp. 1-24) 有斐閣.
- 楠見 孝 (2011b) 生涯にわたる批判的思考力の育成 楠見孝・子安増生・道田泰司(編) 批判的思考とその育成：学士力, ジェネリックスキル, 社会人基礎力の基盤 (pp. 225-237). 有斐閣.
- 楠見 孝 (2012a) 実践知と熟達者とは 金井嘉宏・楠見 孝(編) 実践知：エキスパートという知性 (pp. 3-30) 有斐閣.
- 楠見 孝 (2012b) 幸福の概念と幸福感に及ぼす意思決定スタイルの影響. 日本認知心理学会第10回大会発表論文集, 34.
- 楠見 孝 (印刷中) 働く人の幸福感に及ぼす自己制御モードと批判的思考態度：決定スタイルと実践知獲得. 産業・組織心理学会第28回大会発表論文集.
- 楠見 孝・米田英嗣 (2007) 感情と言語 藤田和生(編) 感情科学の展望 (pp. 55-64) 京都大学学術出版会.
- 楠見 孝・三浦麻子・小倉加奈代 (2009) がん・アトピー性皮膚炎患者・家族のインターネット行動 (1)：批判的思考が情報信頼性評価と病気への適応に及ぼす効果 日本社会心理学会第50回大会発表論文集, 244-245.
- 楠見 孝・三浦麻子・小倉加奈代 (2012) リスクコミュニケーションにおける情報理解：批判的思考態度とメディアリテラシーの影響 特別セッション「食品を介した放射性物質の健康影響を市民/消費者はどう受け止めたか：リスク認知, リスクコミュニケーション, 食品選択行動分析 2012年度日本農業経済学会第24回大会.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things*. Chicago, IL: The University of Chicago Press. 池上嘉彦, 河上誓作他(訳) (1993) 認知意味論：言語から見た人間の心 紀伊國屋書店.
- Lu, L., & R. Gilmour (2004). Culture and conceptions of happiness: Individual-oriented and social-oriented SWB. *Journal of Happiness Studies*, 5, 269-291.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H. R., & Schwartz, B. (2010). Does choice mean freedom and well-being? *Journal of Consumer Research*, 37 (2), 344-355.
- 大石繁宏 (2009) 幸せを科学する 新曜社.
- Oishi, S. (2010). Culture and well-being: Conceptual and methodological issues. In E. Diener, D. Kahneman, & J. F. Helliwell (Eds.), *International differences in well-being* (pp. 34-69). New York: Oxford University Press.
- 大石繁宏・小宮あすか (2012) 幸せの文化比較は可能か? 心理学評論, 55, 6-21.
- 大山泰宏 (2012) 何が人を幸福にし何が人を不幸にするのか：国際比較調査の自由記述分析 心理学評論, 55, 90-106.
- Pierro, A., Leder, S., Mannetti, L., Higgins, E. T., Kruglanski, A. W., & Aiello, A. (2008). Regulatory mode effects on counterfactual thinking and regret. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 321-329.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Savage, L. J. (1954). *The foundations of statistics*. New York: Wiley.
- Schwartz, B. (2004). *The paradox of choice: Why more is less*. New York: Ecco. 瑞穂のりこ(訳) (2004) なぜ選ぶたびに後悔するのか：「選択の自由」の落とし穴 ランダムハウス講談社.
- Schwartz, B., Ben-Haim, Y., & Dacso, C. (2011). What makes a good decision? Robust satisficing as a normative standard of rational decision making. *The Journal for the Theory of Social Behaviour*, 41, 209-227.
- Schwarz, N., & Strack, F. (1999). Reports of subjective well-being: Judgmental processes and their methodological implications. In D. Kahneman, E. Diener,

- & N. Schwarz (eds.), *Well-being: The foundations of hedonic psychology* (pp.61-84). New York: Russell-Sage.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisfying: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, (5), 1178-1197.
- Simon, H. A. (1956). Rational choice and the structure of the environment. *Psychological Review*, 63 (2), 129-138.
- Sternberg, R. (1997). *Successful intelligence*. New York: Plume.
- 竹村和久 (2008) 意思決定と幸福——自分の幸福の選び方 丸山久美子(編) 21世紀の心の処方学 (pp.157-168). アートアンドブレイン.
- 竹村和久 (2011) 多属性意思決定の心理モデルと「よい意思決定」 オペレーションズ・リサーチ, 56 (10), 583-590.
- 竹村和久 (2012) 楠見論文へのコメント——よい意思決定とは何か. 心理学評論, 55, 131-136.
- 竹村幸祐・佐藤剛介 (2012) 幸福感に対する社会生態学的アプローチ 心理学評論, 55, 47-63.
- 都築誉史 (2008) 追求—後悔尺度による意思決定スタイルの測定: 尺度の信頼性と自己肯定意識尺度との関係に関する検討 応用社会学研究 (立教大学), 50, 93-104.
- Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in east and west: Themes and variations. *Emotion*, 9, 441-456.
- von Neumann, & Morgenstern, O. (1944). *Theory of games and economic behavior*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H., & Okumura, T. (2008). Motivated expression of self-esteem across cultures. In R. M. Sorrentino, S. Yamaguchi (Eds.), *Handbook of cognition and motivation across cultures* (pp.369-392). San Diego, CA: Academic Press.
- Wagner, R. K. (1987). Tacit knowledge in everyday intelligent behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1236-1247.
- Zeelenberg, M. (1999). Anticipated regret, expected feedback and behavioral decision making. *Journal of Behavioral Decision Making*, 12, 93-106.

— 2012. 1. 6 受稿, 2012. 4. 9 受理 —